

児童の論理的文章力の育成をめざしたアプリの開発と実践

福島耕平（鈴鹿市教育委員会）

1. 研究の背景と目的

2003年におこなわれた生徒の学習到達度調査（通称：PISA 調査）の結果、日本の生徒の読解力の低下が明らかになった。この読解力は文章読解だけでなく、「テキストの解釈」「熟考・評価」「自由記述（論述）」が含まれる。扱われるテキスト形式は、文章である「連続型テキスト」、図表である「非連続型テキスト」、及びこの二つを組み合わせた「混成型テキスト」がある。この調査では、とくに「自由記述（論述）」を苦手としている生徒が多い実態が明らかになった。

小学校においても、「事実」と「意見」の書き分けや、文章の構成を考えながら論理的文章を書く力が十分に鍛えられていない現状がある。また、毎年実施されている全国学力・学習状況調査の児童質問紙では、文章を書くこと自体に苦手意識をもっている児童が多いことが明らかになっている。

そこで、本研究では、次の3点を目的に研究を進めた。(1)小学生が手軽に使えるiPad用文章作成・構成アプリを開発する。(2)開発したアプリが、児童の書くことへの苦手意識の軽減と、「画像」と画像をもとにした「事実」と「意見」の書き分けにどの程度有用であるか検討する。(3)アプリを活用しないときの文章作成にどの程度効果をもたらすか検討する。

2. 研究の方法

(1)アプリの開発

開発したiPad用アプリは、「論理」にちなんで『ロンリー』と名づけた。『ロンリー』は、2017年6月25日からApp Storeにて無料公開している。開発したアプリの特徴は、自分の主張の根拠となる「画像」を取り込み、画像をもとにした「事実」・「意見」を合わせた「混成型テキスト」を手軽に作成でき、「画像」・「事実」・「意見」を1つのパラグラフとして簡単に入れ替えられ、文章を構成できることである（図1）。また、ログ機能により児童の文章作成過程を可視化できる。



図1 文章作成画面

(2)アプリを活用した実践と検証

公立小学校6年生の国語・社会・理科の授業において、自分の考えをまとめる場面でアプリを活用した授業実践を4回おこなった。授業実践のプレ・ポストで対象児童への質問紙調査とプレ・ポストで同一課題による従来通りの鉛筆で作文用紙に記入する論述に取り組みせ、効果を検討した。

3. 研究結果

プレ・ポスト質問紙の「文章を書くのは好きか」についての問いに対する回答は、ポストの肯定的回答の値が増加し、5%水準で有意差が見られた。また、プレ・ポスト課題の作文における平均文字数は、ポストの値が増加し、1%水準で有意差を見られ、児童はアプリを活用しないときにも量的に書けるようになった。これらのことから、『ロンリー』の活用が児童の文章を書くことへの苦手意識の軽減に一定の効果があつたことが示唆された。

『ロンリー』を活用した場合、「事実」と「意見」を書く欄が明確に分かれているため、児童は「事実」と「意見」を明確に書き分けられた。それに対して、アプリを活用しない場合、自分で意識して「事実」と「意見」を書き分ける必要がある。今回の4回の実践では、プレ・ポスト課題の作文における「事実」と「意見」の書き分けに十分に生かされていなかった。アプリを活用した実践をどの程度おこなうとアプリを活用しないときの文章作成に効果が現れるか継続して検証する必要がある。

ポスト質問紙の「画像があると文章が書きやすいか」についての問いに対する回答は、肯定的回答をした児童が有意に多かった。画像の活用は、児童の文章作成の支援として有効な方法の一つであることが明らかになった。

ポスト質問紙の「書き直しやパラグラフの入れ替えを何度もおこなったか」についての問いに対する回答は、肯定的回答をした児童が有意に多かった。同様に「パラグラフの入れ替えによって伝わりやすい文章になったか」についての問いに対する回答でも、肯定的回答をした児童が有意に多かった。『ロンリー』のパラグラフの入れ替え機能は、児童の文章構成の改善活動を促進すると推察される。

4. 今後の展望

今後も実践を継続し、効果の検証をさらに進めるとともに、どのような学習課題が『ロンリー』の活用に適しているか検討する必要がある。また、『ロンリー』のログ機能を活用し、文章を書くのが得意な児童と苦手な児童の違いを探り、指導に役立てる方法を探りたい。 【共同研究者 勝井まどか（鈴鹿市立鼓ヶ浦小学校）・松野秀治（鈴鹿市立石薬師小学校）】